

いわずに おれなくなる  
ことばでしか いえないからだ  
いわずに おれなくなる  
ことばでは いいきれないからだ  
いわずに おれなくなる  
ひとりでは 生きられないからだ  
いわずに おれなくなる  
ひとりでしか 生きられないからだ

(まどみちお詩集「うちゅうの目」より)

早速、言わせていただきます。

時間と空間の生き証人「総会所」を中心に質問させていただきます。

まず、素朴な疑問です。現在、『真宗』誌をはじめ、様々な書類には総会所の表記に「旧」総会所と「旧」の字がつけられています。その理由をおたずねいたします。旧総会所と記すなら、「新」総会所はどこに存在するのでしょうか。

次に、昨年常会において「保存や移築も含めた幅広い活用方途を「公募」する」と当時の財務長はと答弁されました。その後、『真宗』誌10月11月号に安藤弥(わたる)氏の総会所の歴史についての論考が掲載されました。その「おわりに」という中に「この建物は真宗本廟を支え続けた門徒僧俗の懇念により建造され、法義相続の場として営まれ続けてきた大切な宗門歴史財産である。しっかりとした歴史的、建築学的な検証を行い、その上で、修繕保存活用をめぐるさまざまな方策の可能性を十分に検討し、もしそれがどうしても難しければ、移築や解体といった方向性も(略)慚愧の想いをもって考えていく必要がある」と記されています。

そして「追記」として、『蓮如上人御一代記聞書』第253条の「とうとむ人より、とうとがる人ぞとうとかりける」という言葉を問いかけて、課題にすると結んでおられます。同氏の論考ではありますが、私たちに、総会所の内包する大切な課題が提起されていると痛感いたしました。

その同氏の論考掲載から半年、この論考をどのように受け止められたのだろうかと疑いたくなるような「総会所の移築・用材活用」の募集要項が、唐突に今5月号『真宗』誌に飛び出して来ました。

そこで質問です。

総会所建物について、保存ではなく移築・用材活用と結論を出された財産管理審議会でのどのような議論がかわされたのかを「財産上の理由」以外でお答え下さい。又、昨年常会答弁の保存・移築での幅広い方途での「公募」はいつ、どのような方法で行われたのか。そして、応募はあったのでしょうか。あったとすれば、どのように対応されたのでしょうか。

又、京都工織大学の先生に委託研究を依頼されていますが、その研究内容はどのようなものであったのでしょうか。そして、今年3月を目途にその委託研究で図面化し取りまと

めると言われましたが、その成果は提出されたのでしょうか。さらに建物に対する詳細調査はどのような方々によって、どのように進められたのでしょうか。参考までに、工織大学の先生は小屋裏までは調査していないと聞いております。

そして、先に述べました今月号の移築・用材活用方途の公募（2ヵ月という短い期限付き）において、もし応募がない時、どのような手続きをふまれ、総会所はどのような姿をとっていくのでしょうか。

「とうとがる人」たちの保存嘆願の要望署名も空しく、昨年の常会から約1年で移築・用材活用の公募という当局の暴挙に悲しみと怒りを禁じえません。

最後に、「男女両性で形づくる教団」を大切な指針とする宗門にあって、現在進行中の「教区改編」「議員定数削減」が、組・教区・宗政においての種々の組織に女性参画の機会が少なからず失われていくのではないかと危惧いたします。この危惧が杞憂であることを願いながら、どのように女性参画の方途を考えておられるのかお聞きいたします。

又、慶讃法要基本計画案の具体的な教化の重点施策の一つに「女性聞法会の結成促進」をあげられています。これはどういう内容のものなのでしょうか。女たちは、後にも先にも、「聞く側」に立って歩むことを教えられて来ました。「女性」聞法会と言わねばならないものとは感じてしまいます。

まどみちおさんの「いわずにおれなくなる」ことのほんのほんの一部ですが、どうぞ、心からの答弁をお願いして質問を終わります。ありがとうございました。